

初音は少々待ちくたびれた様子で、曇り顔のまま。雨女さんが来た割には、好天に恵まれたこの日、今のお天気からしてもご機嫌であってほしいものだが、乙女心と秋の空云々と云うように、そもいかないうのである。

「せっかく熱々のパンケーキ出そうと思ったのになあ」

辛うじて湯気立ち上るその一品をレンジに運ぼうとした時、先着のお三方が現われた。

「初音ちゃん、ここで働いてたんだあ」

「奥宮さん！」

店員はすっかり上機嫌に。表情を一変させる術をこうして会得していく十七歳なのであった。

注文品が出てくるまでの間のつなぎとして、三人は試食品（お通しと言ってもいい）のパンケーキを類張っている。そこへ千と櫻のカップルが到着。シロップとクリームの甘い香りが櫻を誘う。

「あー、パンケーキ食べてる。ズルイ！」

「千住さんも隅田さんも、ご試食済み、ですよね」

「そんなあ。あつ、奥宮さん、さ、最後の一枚、キープしていて」

「あら、隅田さんの分はいいの？」

「ちゃんと分けますよーだ」

初音は可笑しくてたまらない。ちゃんと二人の分はとっておいてあるのだ。只今、レンジで加熱中。電子音が鳴ると、

「そうはさせませんよ。ハイ！」

「初音さん、たら」

日曜日の昼下がり。やや遅めのランチをとりながら、五人のトークショーが始まる。司会進行役はいないが、それぞれが分相応に出たり引っ込んだりしているので、円滑である。

「それにしても今日のはまた凄まじかったスね」

「パーベキュー系が目立ったのは想定内だけど、流木とか農業関係の袋類とか、上流側から流れ着いたらしいのがまた多かったからね」

「ま、この間のモノログに出てた通り、ふだんは流れ出さないようなのが増水で運ばれて

きたつてのが証明された訳だ」

「でも、履物や生活雑貨って、そんなに棄てられたりするもの？ 前も拾ったけど齒ブラシとか試供品のヒゲソリとか、あと枕？ バーベキュー関係だけとは思えない」

「いわゆるホームレスのお宅から、とか？ あ、住処があるからホームレスじゃないか」
トボけた調子ではあったが、この舞恵のホームレス説は、実是的を射たものだった。干潟付近にはそういうお宅が見当たらないだけで、対岸の橋の下とか、バーベキュー公園のもつと上流側とか、発生源リサーチをしていないスポットはまだあるのだ。スローフードをいただいている割には、話題がシリアスな感じがしなくもない。だが、環境に対する関心層であるが故に成り立つのがスローである。別にあの食品が健康にいいとか、子どもにはこの製品が無害とか、そういう話ばかりがスローな訳ではない。多様でいいのである。

「で、今回のモルボ書くかい？」

「え、いいんスカ？」

「先に画像アップしとくから、それにコメント入れてもらうつてのでよければ。ま、コラボってヤツだね」

「今日ので意を強くしたことがあるんですよ。それを書かせてもらえらるなら」

アイス烏龍茶を啜る八広。千歳と櫻はいつものカップにアイスコーヒー。カップを置くと、二人そろって、「それって？」

「ゴミ箱ってのは言い得て妙だけど、今回の廃プラ然り、資源に戻せる可能性がある限り、ゴミとは言い難い。ゴミだって思っからつい捨てちゃったり、いい加減に扱っんだと思っんスよ。言葉を変えることで、意識を変えることもできるんじゃないかって。あ、これ六月の講座で先生も言っていましたね」

「成る程ね。自分でもどこかで意識してたのか、モノログはあくまで『物』だし、蒼葉さんの絵の時も『漂着静物』って表現にしている。ゴミってのは前面には出さないようにしてきた気がする。でも、小松さんに言わせるとやっぱり『川ゴミ』『海ゴミ』。被害が甚大なところはそうも言ってもらえない、ってことらしい」

「言い方はともかく、社会の縮図ってことは確かよね。ゴミから世相が見えるって言うか」

「あ、それ同感！ 八月の回は八クンにただついて来ただけだったけど、何が落ちてるか興味が出てきて、今回は私、ちゃんと早起きしたんです」

今はツンデレ姉さんではない。銀行窓口にいる時のようなハキハキした感じ。初音は聞くともなしに耳を傾けている。

「増水はまた別格として、日常的にこつこつゴミが散乱したり漂流したりするってのは、そもそも何が原因なんだろうね？」

ホットコーヒーを手に業平が呷く。ルポで慣らす八広は、自分が書きたいことが明瞭な分、即答が出る。

「大げさかも知れないスけど、今の社会構造って『競争』と『消費』で成り立ってると思っただけですよ。不毛な過当競争が激化して、消費を煽らないとやっていけないようになった。昔からそうだったのかも知れないスけど、近年は特にその傾向が露骨になってきたんじゃないかって。消費する側も、消費行為を通して、欲求を満たすのが条件反射のようになってしまった。でもそんなんじゃ充足感が得られないから『もっと、もっと』ってなる。悪循環スよね」

「つまり、消費する行為そのもの『目的』になるから、物が大事にされない、ってこと？」

「あとは、使い捨てを助長するような安易なモノがあふれるってのも一因でしょうね」

当店でのドリンクの容器は、持ち帰り客用のものと兼ねて、厚手の紙製になっている。千歳のように使い回し可能なマイカップも販売しているが、残念ながら利用客はそれほど多くはない。業平はその一次性の容器を眺めている。

「競争競争で消費者に受け容れやすい、いや楽に扱えるモノを出し続けるのが既定路線になった。安易なモノが増えたのはそのせいってことが。消費者にも問題あるね。オレもマイカップ派で行くかな」

舞恵は、ワンプレートランチに付くスープがあったので、ドリンクは注文していなかったが、これを聞いて初音のもとへ。

「初音嬢、このカップくださいな」

「ありがとうございます。今日は何になさいますか？」

「あら、午前中と言葉遣いが違うじゃない。干潟友達でしょ」

「いえ、お客様ですから」

淡々と応対しているが、内心は嬉しくて仕方ない。これで舞恵姉さんも常連客、いやそれ以前に友達、そう言ってもらえたのが何よりの喜びだった。

「ここタバコ吸えないじゃん。気が退けてたんだけど、これ買ったからには元とるまで来ないよね」

カップは六百円。割引額は一回二十円。つまり三十回来れば元が取れる計算になる。だが、

初回はワンドリンク（一杯二百円）がサービスなので、

「アイステイー、ストレートね」

これで差引四百円となり、二十回こ来店いただくことになる。回数はさておき、人をつなぐサービスでもあることは間違いない。

「『イケイケ、ドンドン』て言うじゃん。あのノリって、今の団塊世代がオレたちぐらい

の時の話だよね」

「社会の風潮つてあるからね。いろいろ大変だったとは思うけど、上げ潮の時好き勝手ができたっていう点では大違いだよね」

ここで再び八広の講話が始まる。

「団塊の皆さんが作った構造つてのは、作り放しであとは知らない、みたいなどこありませんよ。インフラを整えたつてのは確かに一大事だったけど、それをどう維持・再生するかつてのはあまり考えてなかった。会社にしても、若い世代がちゃんと伸びるような仕掛けにはして来なかったんじゃないか。代わりに、自分たちの高給を維持して、安穩と退職時期が来るのを待てばいいようなシステムにはなつて。今、三十代前半くらいの男性社員は、その辺のツケを背負^よつてるんだと思います。それに続く世代も然り。隅田さん、本多さんも苦労はあつたと思うけど、自分なんかも割を食^くつてるなあ、て感じるんすよ」

井にしる、デニッシュにしる、日曜日のカフェめしは程々の温度で提供されているのだが、こつもトク中心だと、その温度あつての味わい、というのが楽しめなくなつてしまつ。女性二人はそこそこ食べ進んでいるのいいとして、男性陣、特に八広については、最初からデリなりサラダなり、温度を問わないメニューの方がいいようだ。今日はパンケーキがあつたからまだよかつたようなものである。

シエフの気まぐれのようなオムレツ井(オムライスではない)をつつきながら、ひと休み。櫻がここで問いかける。

「宝木さんの年代つて、やっぱり就職難で定職に就けなかつたつてこと?」

彼の箸がふと止まる。

「それもありますけど、何かツケを負わされる中で働くのつてどうかなつて疑問が大きくて。いわゆるフリーターつて、働く意思がどうのつてよく云われますけど、競争を強いられる、消費を煽^ほつたりつていう、会社の姿勢についていけなくて回避してる可能性も大きいんすよ。不安定なのは正社員だつて同じでしょ。それなら自分で都度、仕事を選ぶ方がまだいいんじゃないかな、と」

あわて者なところはあつるが、これだけ自分の見識を語れる若手というのもそうそういないのではないか。そんな彼がフリーターという世の中である。ニートという時事用語は少々影を潜めた観はあるが、同じような理由が考えられなくもない。人それぞれの生き方というのがもつと尊重されていい筈なのである。

「ま、ハクンがこんな風に強弁でいられるのは、この奥宮さんがついてるからなんだけどね」

「いやあ、ハハハ」

ヒゲをこすりながら、テレ笑い一つ。たまに息抜きしないと、どこまでもヒートアップしそうなので、彼女がこうしてコントロールする訳である。いい組み合わせだ。

「そうよね。イケイケじゃなくて良くなったんだから、今度は一人ひとりのペースつてのをベースにした社会であってほしいわね」

「非正社員を減らそうつてのは、従来型発想の延長なんだろうね。当人が働き方の多様性を求めた結果だとしたら、それはそれで尊重しないと、社会全体がかえって苦しむことになる」千歳にしても、今更どこかの正社員になろうとは思わない。だが、正社員としてしっかり働いている人もいる。

「舞恵の場合、お気楽な職場だから何とかなってるんだろな。でも金融つてこれまで好き放題やってたところがあるから、世間が見る目はキビシイっすよ。あ、それもツケかあ」

「とにかく、競争とか消費が好きなのは、その人達の間でやってほしいんすよね。そうじゃない人を巻き込んでほしくない。あのゴミだって、競争と消費の産物だとしたら、その手の当事者の中で完結してもらいたいです。いい意味での競争、持続可能な消費が行われる世界ではおそらくゴミは総じて資源として回るんじゃないかってね」

「持続可能もあるけど、選択可能な社会つても重要ね」

櫻がさりげなく話をまとめる。選択可能性、これは千歳が持論とするスロウダウンにも通じるところがある。彼のノロノロはそれを具現化したものと言えなくもない、か。

業平はさっきから「ウーン」と唸っている。いつもの光景ではあるが、またちょっと違うことを考えているようだ。二杯目のコーヒーは深煎りだったようで、自ずと考え事も深くなる。

ルフロンはハクンの弁舌もお気に入りだが、コピーライティングのセンスから考えて、そればかりではなさそうだ。お互いのどこに惹かれたのか、そもそも二人の馴れ初めは何だったのか、そろそろ聞いてみたい気もする。千歳が干潟のことを伝えなかったのと同様、八広も舞恵のことは話していなかった。お互い様ではあるが、ここで教えてもらって悪いことはなからう。

「ところで、八広君。奥宮さんとはどこで知り合ったの？」

「あれ？ 言っちゃってませんでしたっけ」

「名前は覚えてないけど、どこその環境NGOが主催する『社会を変えるお金の使い道講座』とかつてのが春先にあつて、そこで」

「ほら、隅田さんから指令受けて、取材して来たあれすよ」

「でも、聴講するだけの講座だったっしょ。ワークショップ形式とかならわかるけど、何

でまた？」

「ああ、宝木氏つたら例のケータイ、マナーモードにしてなかったんですよ。パネルディスプレイクション中に着信音が鳴って、大あわて。でもその時の着信音がね、知る人ぞ知るのフレーズだったんもんで」

「あのドラムソロの不思議な曲？」

「ルフロンがそれを知ってたてえのがまた奇遇というか。休憩時間に意気投合しちゃいまして。へへ」

「宝木さんを派遣したって意味じゃ、千歳さんが縁結び役ね」

「こそぞ、というところで場を盛り上げる櫻。だが、この発言が思わぬ余波を起こす。縁結び役と言えば、そう、目の前にいる舞恵、そして、その隣の八広も該当するのである。

「ケータイが鳴らなかつたら、というのがありますけど、確かにそうよね。でも、千住さんと隅田さんの方はどうなんですか？ ルフロンから聞いたけど、カードが取り持つこ縁だったとか・・・」

「あ、そうなのよ。カード、エへへ」

「奥宮さんがちゃんと連絡してくれたから、ですよ」

「いえいえ、私のはあくまで仕事ですから。隅田さんが届け出てくれたのが大きいと思いますよ。川辺で拾ったつてのを聞いた時は驚きましたが」

三月のあの日のことが懐かしく思い出される。名前は確認しなかったが、対応してくれたその女性行員さんは、最初は無愛想だった。第一印象というのは残るものである。今は小愛想な舞恵を前にして、「フロントにいれば、正にルフロンさん」とかシャレを思いついて、薄笑いする千歳であった。

「でも、千歳さん、私がなぜカードを落としちゃったかって覚えてます？」

「ええ、そりゃあもつ。暴走自転車でしょ」

「ねえ、宝木さん、三月二十三日の金曜日の夕方って、自転車乗ってました？」

「確か隅田さんから頼まれた調べ物しに、センターに急いでたよな・・・」

「やっぱりね！ 今日、後姿見て思い出したんだあ。彼ですよ。その暴走車！」

黙考していた業平もさすがにこれには面食らったようで、「え、なになに」と来た。

「つまり、ハクンがそのタイミングで自転車を爆走させなかつたら、カードを落とすこともなく、お二人が出会うこともなかつたってこと？」

「こつちとしては御礼を言うべきなのか、それとも謝ってもらうべきなのか、悩ましいわ

あ

ドリンクのお代わりサービスが来た。面白そうな話なので輪に加わりたかった、というの

もある。

「え？ 宝木さんが爆走って、何ですか？」

「暴走も何だけど、爆走つてもなあ。危険人物みたいだ」

「店員さんはいいの。お仕事中なんですよ？」

「奥宮さんの意地悪う。カップ持って来ても割引しませんよあ」

「でも、隅田さんの指令があったから、自分が動いた訳で。つまり、カードを捨得した人が発端でことじゃないスか？」

「何だかなあ。それじゃまるで仕組んだみたいだ」

「千さんのトリックに引っかけちゃったんだ、私」

「櫻さんまでえ」

何とも不思議な縁結びなのであった。和気藹々のカップル二組の間で、ちょっと居心地が悪そうな独り身の業平君は、三杯目のコーヒーに手が伸びる。これだけ飲み足してくれば、紙容器としても本望だろう、か。

「話戻るけどさ。特に団塊の皆さんは競争するのが当たり前だったから、それが体質的に染み付いちゃって、てのはないだろか？」

唸っていたのは、この件だったか。

「そうさね。事情というか、言い分はいろいろあるだろうね。ま、こっちが批判する以上に、『ご年配世代も何かと』今の若者はどうこう』ってやる傾向があるから、話を聞く以前の問題のような気もする」

「お互いにまず話をすればいいってことかしら？」

「なかなかそうもいかないんだよね。年配の男性どうしてても、その競争体質のせいがよくわからないけど、罵り合っばっかりてのをよく聞くし」

ここで再び八広君が一席。

「NGO/NPOの世界でもそれは顕著スね。目的とかやりたいことは同じなのに、似たような団体があちこちにできて。切磋琢磨するとか、相互補完するとか、そのためかと思うとそうでもなかったり・・・張り合っのが目的化してるのかも知れない。だとしたら、もつたいない気がします」

今度は千歳が一旦引き取る。

「ま、団塊世代ということなら、やはりその年代の方に話を聞くのが早道っしょ。親を見ればわかるよつなところもあるけど、忌憚のない話ということでは、身内じゃない方が、ね」

明後日の座談会のゲストスピーカーにこの件でもお話を伺おう、というつもりらしい。激論になる予感もあるが、はてさてどうなることやら。

五人が店にやって来て、すでに一時間余り。トークショーはいつしか雑談会になっていた。「Le Front はわかったわ。ハ (ba) クン、て呼ぶのはどうして？」

「何かあ、風貌が中国人みたいでしょ。ハチって呼ぶよりは中国語で ba って言った方が親しみがこもっていいじゃん、て」

「八って中国じゃ重用されるでしょ。向こうでも M. Ba で通せそうだから、いつかなって止せばいいのに業平がウケ狙いに行く。」

「八広に宝木か、略すと八宝じゃん。縁起いいねえ」

「業平君は、発泡スチロールを発砲させちゃう人だから、八宝菜を変換する時は気を付けなとね」

男性三人がしょーもない会話をしてる最中、舞恵は櫻に耳打ちする。

「ああ見えても彼って詩人なんすよ。語らせてもあの調子だし、ルポも説得力あんだけど、詩というか散文というか、そっち系ですね。ある日ケータイメールで一節届いて、すっかりクラって来ちゃって。私、ガサツに見られますけど、結構そういうのに弱かったりして・・・」

「そうだったのか。」

「何かロマンチックねえ。年上の女性を射止めちゃう程の文才があるってことは、作詞させるとまたスゴイのかしら」

「曲にもよると思いますが、イイ線行くんじゃないスか。詞が書いてタイコ叩けりゃ、残るは作曲。でも音感はあるまいないみたいだから、ドラマーライター止まり・・・何か変なの」

かくいフルフロンさんも打楽器がお得意。その一面はすでに現場で見せてもらっている。ドラムとパーカッションの組み合わせ。共通する趣味（特技？）があるというのはまたいいものである。

「そっいや、今日あのエドさんて、何で『届けたい・・・』が櫻さんのブログだった、わかったんだろ？」

「あら、ハクン気付かなかったの？ 一番下に小さくだけ sakura.s って入れてあるのよ。それを見たんじゃないの。でも、いきなりブログのこと言ってくるのも何よねえ」

「いやあ皆さん、榎戸さんの件では失礼しました。何しろ彼のブログに、うちのバナー貼ってもらったら、何か照会とか注文が増えてきてね。一応恩人みたいところがあるから、強く言えなくてね」

「そういうことか。その場でその話されてたら、余計に鼻についたかもね。ま、メーリングリスト上でも同じかな」

千歳はまだカチンが収まっていなかったようだ。それでも、影響力あるブログの主ということはわかったので、とにかく `negata` に入ってもらって様子を見よう、と心を静めることにした。

「あ、隅田さん、そのメーリングリスト、舞恵も入りたい！」

「そうそう、八広君から連絡待ってたけど、来なかったもんだから、ついそのまま」

「え？ 送ったと思ったんすけど・・・」

「フィルターではじいちゃったか。それとも、入力ミス？」

あわてん坊のハクンは、タイトルを入れ忘れていたようだ。

「いわゆる、無題(No Subject)メールはブロックしちゃうんだよねえ」

「そいつあ、失礼しやした」

「じゃ、改めて、あの名刺に書いてあるアドレスでお願いします」

という訳で、`negata` は、`ルフロン奥宮(ieront)@さん`と`エド冬木(eddy)@さん`が新たに加わることとなった。

今日の初音は午後からモードなので、まだ店にいる。三時になり、ティータイムメニュー客がチラホラやって来て、ちょっといそがしそう。

「では、今日のモノログは合作つてことで行きますか？」

「アクセス数アップに貢献、スね」

「そだね。ちょっと小癪(こじゃ)だけ」

「んじゃ、初音嬢、またねっ！」

「あ、ども」

ケーキでも食べながらさらにゆっくり、というのもアリだったが、ウェイティング客を作ってしまったのは申し訳ない。弁えある五人は再び空の下へ。いつの間にかすっかり晴れ上がっている。

「千住さんて、もしかしてハレ女？」

「そういえば、四月の回からずっと雨に降られたことなかったような。先月は私お休みしちゃったから何だけど・・・ つか、終わってから土砂降りだったんだっけ」

「へへ、それはね、舞恵が雨女だからざんすよ。でも今日はハレ女に軍配ね」

「私、休めないじゃん」

「隅田さん、前回淋しそうだったから、やっぱ櫻さん来ないと」

「これ、八！」

客の流れは小休止中。店員は五人が談笑しているのを眺めている。声は聞こえないが、楽しそう。

「友達って、同じ年代だけじゃないもんね」

青空と連動するようにな、にこやかに頷く初音。お兄さん三人にお姉さん一人。彼女にとっては実に頼もしく、そして気の置けない人々である。

© nendogger